

A 語句の意味と読み

(1) きまりが悪い。体裁が悪い。中途半端で間が悪い。※現代語の「はしたない(下品だ・慎みがない)」とは意味がちがう。／★「はした」=どっちつかず・中途半端。そこから「間が悪い・きまりが悪い」の意になる

(2) 意味=いっそう。ますます。／下に「はしたなし(きまりが悪い)」が省略されている。／物をもらえる場面での勘違いは、ほしがって出しゃばったように見えるので、きまりの悪さが「いっそう」ひどくなる

(3) 悪く言う。非難する。けなす。／直前の「人の上」=他人の身の上・他人のうわさ。「うち」は「ふと～する」の意を添える接頭語

(4) なるほど。本当に。(相手の言葉にうなずいて同意する気持ちを表す副詞。)／人の話を聞いて「たしかにそのとおりだ」と思う場面で使う語

(5) さっと。すぐに。急に。／動作が急ですばやいさまを表す副詞。「涙がさっとは出てこない」となる

(6) 表情やようすを、ふだんとは別のようすにつくる。ここは、悲しげなようすをよそおうこと。「けしき」=ようす・そぶり・表情、「こと(異)」=別だ・ちがう。／教科書によっては「けしき異になす」と漢字で書かれている。「異なり」=別だ・ちがう

(7) 効き目がない。むだだ。何にもならない。(「かひ(甲斐)」+「なし」で、したことの効き目がない、の意。)／現代語の「かいがない」に近い。⑬のように泣き顔をつくってみても「むだだ」ということ

B 文法

(8) 完了(存続)の助動詞「たり」の連体形。下に「とき・折・場合」などの体言が省略されているため、連体形のまま止めている(連体止め)。「～もの」を次々に並べる、ものづくしの章段に特徴的な言い方。／終止形なら「たり」になるはず。⑧「言ひ出でたる」もまったく同じ形

(9) 逆接を表す接続助詞。「～けれども・～のに・～ものの」の意。(「～しながら」という同時進行の意味ではない。)／★心では同情して聞いている「のに」涙が出ない、という食いちがいを表すのがねらい

(10) 打消の助動詞「ず」の連体形。「出で来(こ)ぬ」と読み、「涙がさっと出てこない(こと)」の意。決め手(どれか一つ書いていればよい)=一つめは、直前が力行変格活用「出で来」の未然形「こ」であること(完了の「ぬ」なら連用形に付いて「出で来(き)ぬ」となる)。二つめは、下に「こと」を補って⑫「いとはしたなし」に続く、連体形の位置であること。三つめは、涙が出ないからこそ「はしたなし」なので、完了ではあとの文とつながらないこと。／★この章段で最もねらわれる識別。読み方(いでこ/いでき)が決め手になる

(11) 主格を表す格助詞。「涙が」と訳す。／⑦「幼き子どもの聞き取りて」の「の」も同じ主格。「～の」を「～が」に置きかえて読めるかで見分ける

(12) 「なせ」=サ行四段活用の動詞「なす」の已然形。「ど」=逆接確定条件を表す接続助詞で、「～けれども・～ても」の意。／已然形+「ど・ども」=逆接確定条件。未然形+「ば」(もし～ならば)と混同しない

(13) 強意の係助詞。結び=「出で来る」(力行変格活用の動詞「出で来」)、活用形=連体形。読みは「いできにぞいでくる」。⑪の「いでこぬ」と読み分ける。なお「出で来に」の「に」は、同じ動詞を重ねて意味を強める言い方(「泣きに泣く」の類)で、動作の反復・強調を表す格助詞と説明されることが多い。直前が連用形「出で来(いでき)」なので完了の助動詞「ぬ」と見まちがえやすいが、ここは完了ではない。／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。同じ「出で来」を重ねて、涙があふれて止まらないさまを強めている

C 主語・指す内容

(14) 呼ばれているのは別の人なのに、自分が呼ばれたのだと思いこんだ人。／「ぞ」は強意の係助詞で、下に「呼ばるる」「あらむ」などの結びの語が省略されている(係り結びの省略)。「自分(が呼ばれたの)だ」の意になる

(15) 大人がたまたま口にした、ある人の身の上についてのうわさや悪口。⑥「うち言ひそしりたる」内容。／「おのづから人の上などうち言ひそしりたるに」がそのまま手がかりになる

(16) 大人たちがうわさをして悪口を言っていた、当のその人(=悪口を言われた本人)。／本人がいる前で子どもが言い出すからこそ「はしたなし」になる

(17) 涙。(少し前の「涙のつと出で来ぬ」と対になっている。)／主語が省略されている。前の文と対にして読むと見つかる

D 口語訳

(18) (自分とは)別の人を呼んでいるのに、自分(が呼ばれたのだ)と思って出しゃばって進み出た場合(は、きまりが悪い)。／「に」は逆接の接続助詞(～のに)。「たる」は下に「とき・場合」が省略された連体止め

(19) 幼い子どもが(その悪口を)聞き覚えていて、その(悪口を言われた)当人がいる所で言い出してしまった場合(は、きまりが悪い)。／「子どもの」の「の」は主格で「子どもが」。「あるに」=いるときに・いる所で

(20) 「なるほど本当にしみじみと気の毒なことだ」などと聞いてはいるものの、涙がさっと出てこないのは、たいそうきまりが悪い。／「ながら」は逆接で「～ものの」。「ぬ」は打消なので「出てこない」と訳す

(21) 泣き顔をつくり、(悲しげに)ふだんとは違うようすをよそおってみるけれど、まったく効き目がない。／「かひなし」=効き目がない・むだだ。現代語の「かいがない」に近い

E 内容・記述

(22) 呼ばれているのは別の人なのに、自分が呼ばれたと思いこんで進み出てしまい、勘違いだと分かって引っこみがつかなくなるから。とくに⑤のように物を与える場面では、ほしがって出しゃばったように見えるので、いっそうきまりが悪い。／「異人を呼ぶ」と「我ぞ」の食いちがいが原因。⑤「いとど」まで含めて答えると厚くなる

(23) 自分がふと口にした他人の悪口を、幼い子どもが聞き覚えていて、悪口を言われた当人のいる前で口に出してしまうから。子どもに悪気はなく、止めることも言いつくろうこともできないので、いっそう気まずい。／「おのづから(=たまたま)」つい言った悪口が、思わぬところで本人に届いてしまう

(24) 人が悲しい話をして泣いているのに合わせ、心では「本当に気の毒だ」と思って聞いているのに、涙がさっと出てこない状況。泣くべき場面で泣けず、間が悪くきまりが悪いということ。／★⑩「ながら」の逆接が、そのまま気まずさの理由になっている

(25) 悲しい話では涙が出ないのに、すばらしいことを見聞きするときにはまっさきにあふれるほど涙が出る、という正反対の対比になっている。思いどおりにならない人の感情のおかしみを、涙の出方の食いちがいとらえている。／★「出で来ぬ(出てこない)」⇔「出で来にぞ出で来る(出て出てくる)」の対。記述の答えはここに集まる

F 文学史(本文全体をふまえて答える)

(26) 作者＝清少納言／仕えた中宮＝定子(一条天皇の中宮定子)。／平安時代中期(十一世紀初めごろ)の成立

(27) 類聚的章段(ものづくしの章段)。ほかの例＝「うつくしきもの」「にくきもの」「すさまじきもの」など。／『枕草子』の章段は、類聚的章段・日記的章段・随想的章段の三つに分けて説明されることが多い

(28) 随筆。のちの作品＝『方丈記』(鴨長明)または『徒然草』(兼好法師)。この三つをあわせて日本三大随筆という。／『枕草子』＝平安中期、『方丈記』＝鎌倉初期、『徒然草』＝鎌倉末期

【現代語訳(全文)】

きまりが悪いもの。(自分とは)別の人を呼んでいるのに、自分(が呼ばれたのだ)と思って出しゃばって進み出た場合。物などを与える場面では、いっそう(きまりが悪い)。たまたま他人の身の上のことなどをふと口にして、悪く言っていたところに、幼い子どもがそれを聞き覚えていて、その(悪口を言われた)当人がいる所で言い出してしまった場合。

しみじみと気の毒な話などを人が話し出して、ふと泣いたりなどしているときに、「なるほど本当に気の毒なことだ」などと聞いてはいるものの、涙がさっと出てこないのは、たいそうきまりが悪い。泣き顔をつくり、(悲しげに)ふだんとは違うようすをよそおってみるけれど、まったく効き目がない。(ところが)すばらしいことを見聞きするときには、まっさきに、ただもう(涙が)出て出てくるのだ。